

令和2年3月11日

プレスリリース
 報道関係者各位

江戸時代唯一の貝化石図譜の作者は讃岐の大庄屋 ～釧路校教員らの研究グループが解明～

概要：『閑窓録』（かんそうろく）は、江戸時代で唯一の刊行された貝化石図譜で、後刷本の『貝石画譜』とともに、日本の博物学・古生物学史上、重要な文献として古くから知られてきました。本書は江戸時代後期の文化元年（1804年）に「耕雲堂灌圃」によって刊行されましたが、この編著者の実名や経歴については永らく不明でした。

この度、本校の松原 尚志准教授と京都産業大学の雲岡 梓准教授（元本校准教授）の研究グループが本書を全文翻刻した上で検討を行った結果、その作者の正体は讃岐国白鳥（しろとり）松原村（現香川県東かがわ市）の俳人で、大庄屋の竹内宗助（たけうちそうすけ）（生年不詳～1816）だったことが明らかとなりました。また、地質・古生物学および国文学双方の観点から、本書に描かれている貝化石や詩歌句についても詳しい分析がなされました。これらの研究成果が令和2年（2020年）3月12日発行の「瑞浪市化石博物館研究報告」第46号に公表される運びとなりましたのでお知らせいたします（図1）。



図1. 公表された論文のはじめの2ページ（瑞浪市化石博物館研究報告，no. 46号より）。

時代背景：江戸幕府8代将軍徳川吉宗の主導による享保の改革（1716年～1735年または1745年）以降、キリスト教とは無関係の実学（医学・薬学・工学・天文学など）に関連する漢訳洋書の輸入が緩和されました。これに伴い、本草学や蘭学が武家や医家にとどまらず、商人や上級農民の間で盛んとなり、物産会や薬品会が大都市で開催されるようになりました。さらに、江戸時代後期の初めには、蘭学や本草学の愛好者の中から、岩石・鉱石・化石・考古遺物を収集・展示し、その趣を楽しむことを主な活動とするグループ「弄石社（ろうせきしゃ）」が派生しました。近江（現滋賀県）の木内石亭（木内小繁重暁）（1725～1808）は弄石社の主宰者としてとくに有名で、彼の著作による石の解説書『雲根志』（木内，1773，1779，1801）は、京にとどまらず、大坂・名古屋・江戸でも重版されるほど好評を博しました。弄石社は全国に数百名もの社中（～会員）を擁していました。また、石亭の自宅や岩石・化石コレクションは、『東海道名所圖會 卷ノ二』（秋里，1797編）では名所の一つ「山田石亭」として図示・解説されています（図2）。18世紀終わりから19世紀初めの日本では「石ブーム」が巻き起こっており、『閑窓録』はこのような時代の中で刊行されました。



図2. 『東海道名所圖繪 卷ノ二』で紹介されている石亭の奇石怪石コレクション（国立国会図書館デジタルコレクションより）。彼のコレクションは2千点あまりにもものぼることが述べられています。

「耕雲堂灌圃」に関する従来の見解：

- 1) 森 林太郎 (=森 鷗外) (1937)：「帝室博物館書目解題」の中で『貝化石譜』（=『貝石画譜』）について、「無名ノ氏ノ序ニ「灌圃」の撰とナセリ氏ヲ知ラズ」と述べています。
- 2) 糸魚川淳二・赤木三郎 (1978)：序の記述から、灌圃は役人だと推定しています。
- 3) 日本地学史資料調査委員会 (1979)：『貝石画譜』の著者を「岩崎灌圃」としています。

しかしながら、この見解は江戸の本草学者「岩崎灌圃」との混同によるもので誤りです。

4) 磯野直秀 (1999) : 本書に描かれている化石の所蔵[寄贈]者の居住地から、尾張以西の人物であると考えました。

5) 磯野直秀 (2005) : 本書に描かれている化石の所蔵[寄贈]者には四国・近畿・尾張の人が多い、序を石亭が執筆していることから、上方の人物と推定しました。

研究成果 :

1) 全丁を翻刻

『閑窓録』の全丁をレイアウト・文字数をそのままに翻刻しました (図 3)。

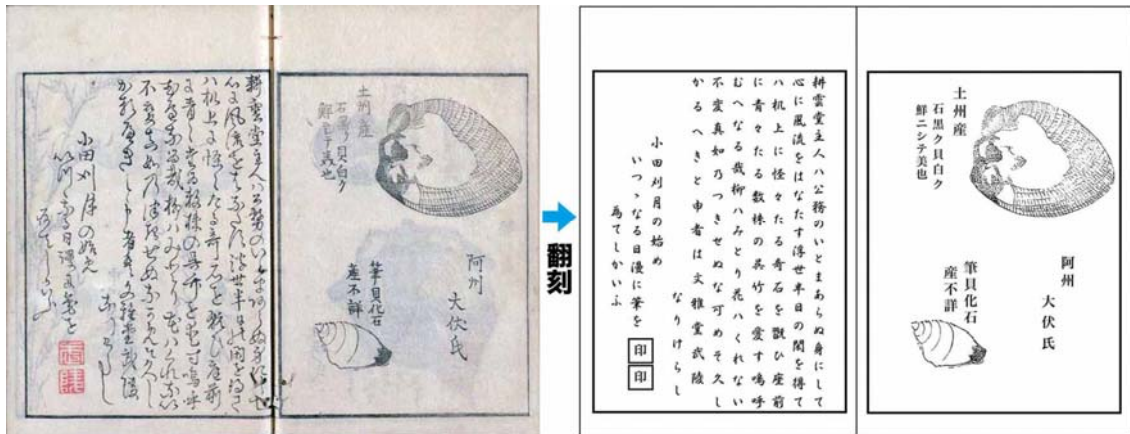


図 3. 元の丁 (左 ; 国立国会図書館デジタルコレクションより) と翻刻された丁 (右)。

2) 序を木内石亭が執筆したいきさつを解明

すでに知られていたとおり、序の一つは、当時、「石之長者」として有名だった木内石亭によるものですが、翻刻した序文の解読から、石亭は灌圃との直接の面識はなく、共通の知人で尾張在住の(松鳳堂)景山という人からの依頼を受けてこれを執筆したことが明らかとなりました。

3) 「耕雲堂灌圃」の正体を解明

『武陵来簡集』(大谷, 1976 編) と『白鳥町史』(白鳥町史編集委員会, 1985 編) の記述から、「耕雲堂灌圃」の正体は讃岐の白鳥松原村(現東かがわ市)の俳人で大庄屋の竹内宗助(たけうち そうすけ)であったことが明らかとなりました。彼の略歴を上記の文献に基づきまとめると、以下のとおりとなります。

竹内灌圃(生年不詳~1816)。幼名 村秀。名は宗助。通称 長左右衛門。堂号 耕雲堂。俳号 連城のち灌圃。讃岐国大内郡白鳥松原村の竹内家本家(通称 中竹)の5代当主竹内佐六(通称 与五郎)の三男として生まれ、のちに西の竹内家(通称 西竹)初代当主となる。俳諧にすぐれ、二人の兄、佐六(中竹6代当主; 俳号 化龍)および伊佐衛門(中竹7代当主; 俳号 有光)とともに、京の俳人、三宅嘯山(1718~1801)の門人であった。また、丹波の西尾武陵、能登の井田寒涯などの俳人との交流があった。

＜主な経歴＞

寛政九年（1897年）、藩命により兄伊佐衛門の後を継ぎ、白鳥の大庄屋となる。

文化元年（1804年）、牢人株を貰い受け、帯刀を許される。

同年9月、竹石二愛の図譜『閑窓録』を刊行。

文化8年（1811年）功により、高松城内において晒一反と金子千疋を頂戴する。

文化9年（1812年）大庄屋勤務の御墨附を頂戴する。

文化11年（1814年）病身のため付役御免。大庄屋に子正之助村良（長甫）が任じられる。

文化13年（1816年）9月17年死去。法名 賢勝院釋灌圃。

4) 描かれている化石の種類・産出層・地質時代・寄贈者を分析

『閑窓録』には主に古生代ペルム紀から新生代第四紀更新世までのさまざまな地層から産出した112ロット（標本単位）の標本が描かれていることが明らかとなりました。これらのうち、55ロットが二枚貝類、38ロットが腹足類（巻き貝）、2ロットがアンモナイト類でした。また、化石の産地は北は蝦夷（^現北海道）から南は日向（^現宮崎県）にまで及びますが、美濃（^現岐阜県）と土佐（^現高知県）がそれぞれ13ロットと最も多く、次いで灌圃の地元である讃岐（^現香川県）、阿波（^現徳島県）、信濃（^現長野県）・伊勢（^現三重県）・尾張（^現愛知県）、越後（^現新潟県）・近江（^現滋賀県）・紀伊（^現和歌山県）の順となっていました。この中には現在知られている多くの化石産地が含まれています。また、本書に描かれている化石は北は陸奥の相馬（^現福島県相馬市）、南は豊後（^現大分県）に在住する70名から寄贈を受けたもので、寄贈者には木内石亭をはじめとする当時著名だった弄石家が含まれていることも分かりました。

5) 収められている詩歌句と画の題、作者を分析

本書には序跋を除いて40の詩歌句と2枚の画が収められていますが、その題は竹や秋が圧倒的に多く、大部分が化石・石とは無関係であることが明らかとなりました。

また、詩歌句の詠み手や画の作者は41名で、その中には公卿や伊勢神宮の神官のような高貴な人物に加え、当時著名であった俳人や灌圃の地元の讃岐の俳人や医師が含まれていることも分かりました。一方、上記の化石の寄贈者と重複する人物はわずか5名のみでした。

6) 『閑窓録』の構成と出版されたいきさつについて考察

『閑窓録』は、貝化石図譜に竹・秋を題とした詩歌句が挿入された奇抜な構成となっています。このことについて、編著者の灌圃は自跋（=あとがき）で、「「貝石乞う」との文書を尾州の松鳳堂（景山）に託したことによって全国各地の同好の諸氏から寄贈を受けた奇石を一人で楽しむのは私の本意ではない。そこで、版木に彫って筑紫の誰、吾妻の某に送ろうと筆をとったところ、日頃愛でている竹の葉に対する愛情の妄念もはらうことが出来なかったため、これらの詩歌句も加えて、「竹石二愛の巻」とした」と述

べていたことが明らかとなりました。また、本書に収められている2つの和歌には「祝いの言の葉」・「祝いの心」を贈るとの詞書が添えられています。灌圃の経歴を見てみると、『閑窓録』が刊行された文化元年（1804年）に、牢人（=浪人）株の取得によって帯刀を許される荣誉に預かっていますので、本書はこのことを記念した出版物である可能性があります。一方、灌圃の「竹石二愛」の趣向は弄石家の間では好まれなかったようで、のちに序の一部と詩歌句、跋文の丁と奥付を削除した後刷本『貝石画譜』が刊行されています。

7) 灌圃の化石コレクションの行方について推定

灌圃の家系（「西竹」）は2代後の明治時代の初めに断絶し（白鳥町史編集委員会，1985編）、屋敷や蔵も現存していないことから、残念ながら、彼の化石コレクションは散逸してしまったものと推定されます。

8) 分野横断型の共同研究による研究成果

本研究は、地質・古生物学と国文学という、専門分野が全く異なる研究者の共同研究による成果です。このような分野横断型の共同研究は、北海道教育大学釧路校という、全国でも最小規模の教員養成系大学だからこそ可能であったとも言えるでしょう。

<参考資料>

研究グループ構成員：

松原尚志：北海道教育大学教育学部釧路校地域学校教育実践専攻 准教授。博士（理学）。専門は地質学・古生物学。本研究では、化石の同定と産出層・地質時代の比定、寄贈者の特定、図・図版の作成および全体のとりまとめを担当。

雲岡 梓：京都産業大学文化学部京都文化学科 准教授。博士（文学）。専門は古典文学・近世文学。本研究では全体の翻刻と主要な部分の現代語訳、収録されている詩歌句の題の分析を担当。

論文の書誌情報：

松原尚志・雲岡 梓（2020）江戸時代の貝化石図譜『閑窓録』の研究。瑞浪市化石博物館研究報告，no. 46，pp. 57-102.

引用文献：

秋里籬寫（1797）『東海道名所圖繪 卷ノ二』。小林新兵衛。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2559315>）※

磯野直秀（1999）日本博物学史覚え書—VII. 慶應義塾大学日吉紀要 自然科学，vol. 26，p. 98-116.

磯野直秀（2005）描かれた動物・植物—江戸時代の博物誌—. 国立国会図書館特別展示。国立国会図書館。（<https://www.ndl.go.jp/nature/index.html>）

糸魚川淳二・赤木三郎（1978）貝石画譜—江戸時代の化石図鑑—。瑞浪市化石博物館研究報告, no. 5, p. 183–185.

日本地学史資料調査委員会（1979）明治前日本地学文献集。地学雑誌, vol. 88, p. 58–72.

木内小繁重暁（1773）『湖上石話 雲根志 前編』。全5巻。齋藤庄兵衛／前川六左衛門／高橋平助。（<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2608342>）※

木内小繁重暁（1779）『湖上石話 雲根志 後編』。全4巻。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2605461>）※

木内小繁重暁（1801）『諸国石話 雲根志 三編』。全6巻。伊丹屋善兵衛。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2606488>）※

耕雲堂灌圃（1804）『閑窓録』。書林橘仙堂 平野屋善兵衛。（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2534028>）※

耕雲堂灌圃（1804）『貝石画譜』：[書林橘仙堂 平野屋善兵衛]。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2540513>）※

森 林太郎（森 鷗外）（1937）帝室博物館書目解題。In: 木下杢太郎・小島政二郎・齋藤茂吉・佐藤春夫・平野萬里・森 於菟（編）『鷗外全集 著作編』第10巻: p. 469–656. 岩波書店.

大谷篤三（1976 編）『武陵來簡集』。西尾精一.

白鳥町史編集委員会（1985 編）『白鳥町史』。白鳥町。（<https://www.higashikagawa.jp/tyoushi/5.pdf>）

※著作権の保護期間満了の出版物

【お問い合わせ先】

北海道教育大学教育学部釧路校

担当：松原 尚志

（地域学校教育実践専攻 理科教育実践分野 地学研究室）

Tel/fax: 0154-44-3398

Email: matsubara.takashi@k.hokkyodai.ac.jp